

にも取り組み、積雲対流と大規模運動の相互作用に関する新たな知見を得た。

さらに柳井会員は1978～79年に行われた FGGE の観測データを用いて、チベット高原を中心としたアジアモンスーン域の冬から夏にかけての大規模循環場と熱・水蒸気収支の解析を行った。アジアモンスーンの季節の進行には、チベット高原上に励起された循環と地球規模のモンスーン循環が相互に関係しあっている

ことを明らかにした。また、西部高原では年間を通して地面からの顕熱輸送が、一方、東部高原ではとりわけ夏期に凝結熱の効果が重要であることを示した。

以上の柳井会員の一連の研究は、熱帯大気を理解する上で重要である大規模循環、大規模波動擾乱、非断熱過程に関する研究の進展に大きく貢献するものである。よって日本気象学会は柳井会員に日本気象学会藤原賞を贈呈するものである。



南鳥島気象観測所における二酸化炭素の観測開始

—世界気象機関 (WMO) 大気バックグラウンド汚染観測網 (BAPMoN) 基準観測所として—

1. はじめに

気象庁は、1993年3月より、WMO BAPMoN 基準観測所として、南鳥島気象観測所 (北緯24度18分、東経153度58分 東京都小笠原村)において、大気中二酸化炭素濃度の連続観測を開始しました。

気象庁では、これまで、岩手県三陸町綾里の気象ロケット観測所において、WMO BAPMoN 拡大地域観測所として、二酸化炭素、メタン、フロン等の温室効果気体の観測を1987年から実施しています。

一方、WMO は、二酸化炭素等の観測を行う基準観測所は世界に約30ヶ所必要であるとしており、加盟国に北西太平洋域等のデータ空白域に基準観測所を設立するよう要請していました。今回の南鳥島での観測開始は、この要請に応えるものです。

2. データの公表

南鳥島の大気中二酸化炭素濃度の観測データは、綾里の観測データと同様、気象庁温暖化情報センターの「地球温暖化監視レポート」、同センター内にある世界気象機関温室効果気体世界資料センター (WDCGG) の「WMO WDCGG DATA REPORT」により公表されます。また、FD でも提供可能です。

3. 今後の計画

南鳥島では、今後、基準観測所として観測項目を充実させることを計画しており、1993年度にはメタン、一酸化炭素、地上オゾン、全量オゾンの観測を開始し、1994年度以降には大気混濁度及び降水の化学成分等の観測を開始する計画です。

(気象庁観測部測候課 城尾泰彦)



「国連水の日—地球と水を考える日」制定記念行事の報告

「国連水の日—地球と水を考える日」制定記念行事が、平成5年3月22日(月)、及びこの日を中心として1週間程度、東京で開催された。

昨年6月3日から14日までの12日間にわたり、ブラジルのリオデジャネイロにおいて「環境と開発に関する国連会議」いわゆる地球サミットが開催され、地球温暖化、酸性雨のように人類共通の課題となりつつある環境問題に対処するため、良好な環境を保全し、または創造するための新しいルールの確立や、持続可能な開発のあり方などが議論された。その結果、21世紀に向けた行動計画である「アジェンダ21」が採択され、その第18章では、「淡水資源の質及び供給の保護」について定められるとともに、「世界水の日」を制定するよう勧告がなされた。

これを受けて、昨年12月22日第47回国連総会本会議において、1993年より毎年3月22日を「国連水の日」とすることが決議され、この日には、水資源の保全・開発やアジェンダ21の勧告の実施に関する出版、会議、セミナー、展示会などを行うことにより、人々の水に対する認識を増進させるよう提唱された。

我が国においても、3月22日には国土庁等関係省庁が主催し、外務省等関係機関の後援、水の週間実行委員会の協賛により、「国連水の日—地球と水を考える日」制定記念講演会等が中央官庁合同会議所大会議室において実施されるとともに、関係各省庁による各種行事（パネル展示、シティーアピール等）も実施された。

講演会では、東京大学名誉教授の高橋 裕先生から「ユネスコにおける水問題の国際協力」と題して、IHPの現状と我が国の水分野での国際的な役割について、詳しく説明があった。また、東京大学名誉教授の志村博康先生は「世界の水資源利用の展望とアジアの水利近代化の課題」と題して、世界的に見た農業水利の中で、アジアの占める位置と今後の問題点について具体的に数値を示して講演された。両先生のご講演は、常日頃、国内問題ばかりに目が行きがちな我々にとって、新たな刺激を与えるものであった。会場は約130人の熱心な聴衆で満員となり、時間を超えるなど盛況であった。

パネル展示では、小田急新宿駅地下中央コンコースにおいて、3月20日から27日まで12枚のパネルを展示した。展示場所は、通勤客や買い物客が一日中行き来するので、多くの人々に水の貴重さを訴えることができた。

この他、建設省、国土庁の共催により横浜市「新都市プラザ」において、シティーアピールやパネル展示を行った。シティーアピールでは女優の喜多島舞さんを水特使に任命し、「水の日」宣言やコンサート、記念品プレゼント等が行われた。また、地方でも水関係の各機関がそれぞれ独自の企画でイベントを実施した。

今後も毎年3月22日には、「国連水の日」にちなんだ各種行事が実施される予定である。

(国土庁水資源部 神矢 弘)



国際 HEIFE シンポジウム

文部省国際共同研究特別事業費によって行われた「黒河流域における地空相互作用に関する日中共同研究」HEIFE (HEiHe river Field Experiment) の最終年にあたり、乾燥地における地表面と大気との相互作用に関連した気象学、水文学的な観測研究の成果および砂漠地における水利用、砂漠化防止のための方策など応用面を含むこの事業の成果を広く世界に発表し、同時に関連研究者にも討論に参加してもらうために表記の国際シンポジウムが開催されます。

主催 京都大学防災研究所, 中国科学院蘭州高原大気物理研究所

会期 1993年11月8日～11日

予定されているセッション

1. HEIFE の概要
2. 大規模過程
3. 水文学, 水循環, 降水
4. 境界層過程
5. 放射, エアロゾル

6. 生物気象, 水利用

7. 討論, 将来計画

場所 京大会館 (京都市左京区吉田河原町)

使用言語 英語

定員 120名程度

参加料 無料

参加/発表申込締切

1993年6月30日

連絡先 サーキュラー No.2 が出来ています。下記に御請求下さい。

〒611 京都市五ヶ庄 京都大学防災研究所

光田 寧

TEL 0774-32-3111

FAX 0774-31-0026

その他 本シンポジウムのプロシーディングは後日刊行されます。

編集後記: 暖冬にもかかわらず猛威をふるったインフルエンザがようやく下火になったと思ったら、今度は、くしゃみ・鼻水・鼻づまり、目はウルウルで睡眠不足という人が回りに目立ち始めました。4月号が皆さんの手元に届く頃にはこれらの症状も嘘のように消失させているでしょうが、来年になれば、又、同じ事の繰り返し。最近では、天気予報と共にスギ花粉の予報まで新聞・テレビに出る始末。

先日、このスギ花粉症の防御策をテレビで放送していました。番組の中で某医大の先生が言うには、「マスクの中に濡らしたガーゼをいれると効果倍増。洗眼・うがい・手洗い励行。但し、鼻の粘膜は非常にデリケートなので、湯水で洗うのは避ける」。花粉症の諸症状は花粉を体外へ排出するという身体の防御反応に過ぎないのですが、たまたまそれが過剰に出たものであって、症状だけを薬や注射で無理に抑えるのは考えものとのこと。根本的な花粉症対策はマスク・眼鏡などで花粉

を体内に入れないか、又は、減感作療法という長期間に渡る体質改善しかないようです。これが面倒な人は薬や注射に頼って、2月半ばから4月半ばまでの2ヶ月間、その場をしのぐほかありません。この場合花粉が大量に飛散し出す1週間前から治療をすると効き目がアップするそうで、より精度の高い気象の予測とスギの開花予想が必要になってきます。

ところで、異常気象も環境破壊によって引き起こされた地球の防御反応の一つなんでしょうか？

気象談話室の係りになってほぼ1年が経ちました。原稿の依頼や査読は「教育と普及委員会」が担当しておりますが、皆さんからの投稿も勿論大歓迎いたします。1月号の投稿案内を御覧下さい。コーヒーでも飲みながら楽しく読めるような記事をお待ちしています。

(大泉三津夫)